

宗教と精神医学

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□ はじめに □

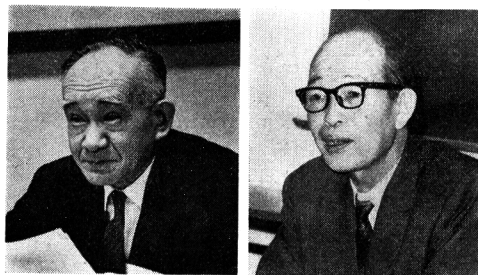
司 会 三 浦 岱 栄

宗教と精神医学の関係の問題は、私がかねて“精神医学”の展望欄で述べたごとくきわめて重要な各種のモメントを含んでいるのであるが、このテーマがようやくわが国においても日本精神神経学会の総会において今回“正式”にとりあげられるにいたったことは、司会者ならびに副司会者として慶賀に堪えないしだいである。なぜなら、このことは、わが国の精神医学も旧来の nosological な、あるいは institutional な精神医学の枠をこえて、広く social psychiatry の領域にまで進出してきたことを示す兆候のひとつだと司会者たちは考えるからである。換言すれば、現在の、あるいはこれからの精神医学は広く“人間の科学”の一分野を占めなければならぬという使命観に立つとすれば、理論的には、人間の共通の母胎ともいうべき、心の奥深く巣くついているところの本能-情操の探究、開明に、宗教も精神医学もそれぞれ有力な突破口を提供してきたことは、歴史的にも明らかな事実で、実践的には、精神衛生の一端を荷負うことが約束されているといつてもよいだろう。本日は 14 名

の会員から、宗教と精神医学の関係の各方面にわたつての研究報告の申し込みをいただき、司会者側よりの厚い感謝の意を表したい。またその報告のあるものについては指定討論をお願いしたが、これまた快諾くださったことをお礼申しあげる。ただここでご訂正願いたいことがひとつあるが、それは藤沢氏と小西氏の報告に対してそれぞれ司会者側より、吉野雅博博士ならびに高良武久名誉教授に指定討論をお願いいたし、ご快諾を得ていたもので、それも全部総会事務局にまで通知していたのであるが、印刷された総会プログラムではこのおふたりの名前がおちており、このご両人からご注意をいただいて初めて司会者もこれを知つたしまつて、はなはだ恐縮に存じます。プログラムにはのつておりませんが、司会者の権限でこのご両人には指定討論者としてご参加くださるようあらためてお願いいたします。

なお時間に余裕がありましたならば一般フロアからの追加討論もできるだけいたしたいと思います。いずれにせよ今回の催しを機会に、わが国においても、多くの精神科医が今後ますます宗教問題にも関心をよせられ、公正なる研究をなされることを希望してやみません。開会にあたり、司会者として一言あいさつを申し述べさせていただきます。

写真 左: 司 会 三浦岱栄氏 (慶大神経)
右: 副司会 千谷七郎氏 (東京女医大精神)



* 第 18 分科集会, 1966 年 4 月 7 日, 東京国立教育会館